

いま神様に申上げてゐる事に、注ぐことが出来るからです。

(例) 糸子の母は彼女に、「今朝お祈しましたか、」と問うた。すると糸子は「はい。さうする筈でしたが、祈つて居る間に、梅子がボール遊びをして居るのが目につきました。そのボールは泥の中に落ちたやうでした」と。多分、糸子は目を閉ぢないで祈つてゐたから、自分の氣がさられ、何を神に申上げたか知らなかつた。

一一、神様は私共の願に、答へて下さいますか。

私共の願うた事が、お互の爲になることなら、神様はその願をきき届けて下さいます。

(例) 赤坊がその母に鉄をくれされたつた。しかし母は「傷するからいけない、」と叫ぶた。三郎が復習のとき、鉛筆を求めらるや、母は鉛筆を與へた。彼は喜んで働いたのである。

一二、食事の前後に祈らねばなりませんか。

私共は食事の前か後に、食物に對する感謝の祈をせねばなりません。

(八章答二三)

一四、子供に適した感謝の言をいうて下さい。

「神様よ、結構な食物を感謝いたします。イエス様によつて、私共を善い子にして下さい。」

私共はどんな感謝の祈をするも、常に目を閉ぢ、考へつつ心を込めて申上げねばならぬ。一向、氣もかけないで、わけの解らぬ事を、こちやこちや言うてはならぬ。

一五、神様に従ふとは、どういふ事ですか。

神様に従ふとは、その仰せ給ふ正しきを、行ふこととあります。

正しきを行ふは、神の御意を行ふ所以であり、また神の私共に爲させんと欲し給ふ所を、爲す事である。

(例) 一少年兵が、「天の使は、どんなに神の御意をなしますか、」と問うたとき、その答は次の如きであつた。「何も問返さず、すぐに喜んでします」と。その如く私共も亦、正しい事を行はねばならぬ。

一六、神様は私共の行ふべき正しき事を、どうしてお知らせになりますか。

神様は私共に、聖書や、善人や、又は心に御聲をきかせて、その正しき事を教へ給ひます。

(七章答四)

一七、聖書は眞を語る事につき、何と教へてゐますか。
 聖書には、私共が常に眞を語らねばならぬこと、また神様は、どんな嘘でも偽ても、ひどく憎み給ふと教へてあります。

(一〇章答三一—三五)

一八、聖書には子供らが、其の親に従ふべきことを命じてゐますか。
 聖書には次の如く教へてあります。「子たる者よ、なんぢら主にありて両親に順へ、これ正しき事なり」と。(エペ六・一)

(十章答一七—一九)

一九、神様と親との他に、私共の従はねばならぬ人がありますか。
 神様と親との他に、私共は上にあつて治め、導いて下さる人や、先生または他の指導者たちに従はねばなりません。

(七章答五)

二〇、神様は私共が、他の人々に對して、どうせねばならぬと、お命じになりましたか。
 神様は次の如く仰せられました。「なんぢ盗むなかれ」と。(出二〇・一五) これは自分のてない物を絶対に取つたり、かくしたりしてはならぬとの事です。

(十章答二六—三〇)

二一、私共は誰を愛すべきですか。
 私共は凡てに勝りて神様を愛さねばなりません。また凡ての人、ことに私共の爲に、盡してくれる人々を、愛さねばなりません。

私共が見ての人々を心から愛するとき、その事を行爲に顯さんと望むものである。(例)「少女あり、」私共は母さん、とても愛してゐますから、あなたのため死ぬことも出来ます、」さうした。するに母は、「お前が死んで呉れる事を望まない。しかし若し私を愛するならば、勝手に往つて、お茶の道具を洗つて下さい、」さうした。

二二、私共に不親切をした人々には、どうするのですか。
 私共に不親切をした人々には、イエス様が其の敵になされし如く、彼らを愛し、

教し、また祈つてあげねばなりません。

眞にイエスを愛する者は、自分に不親切をした人に對し決して仕返しをしない。甚吉は學友の一人から蹴られ、そのバットを折られ、又他の友のフットボールを壊されたが、之に仕返しをしなかつた。(敬虔な心持でイエスが死の時に當り、自分を死に至らしめた人々のため祈られた事を語れ。ルカ二三・三四)

二三、私共は動物を、どんなに取扱はねばなりませんか。

私共は動物を親切になし、決していぢめたり傷けたりしてはなりません。なぜなら、彼らは神様に造られたものだからです。

(二三章答一二)

(幼年義勇團の誓約を参照せよ)

二四、聖書には悪しき言や、よくない癖につき、何ぞ教へてありますか。

聖書には悪い言や、よくない癖を行ふは、神様の御心をいたため、悪いことであると教へてあります。

深い手をしてゐることはよいもの、しかし更によいのは清い唇を有つことである。清い唇とは、汚れた言が出て来ない口さの意である。悪い癖は時々非常な禍を來たす。(敷衍)(例)一少年あり、かつき怒つて本を妹になげ

つけた。それが元となつて目が傷き、遂に盲となつた。

二五、酒や煙草に就いては、どうすべきですか。

私共は酒や煙草に、決して手を觸れてはなりません。これらは各方面に、身體の害となるものです。

(二三章答一四、一五)

二六、汚い言や、荒い言を使ふのは、悪いことですか。

荒い言を使うたり、他人に言はせたり、また汚い話を聞いたり、言うたりする事は、甚だ悪いことで、また神様の喜び給はぬところです。

(一〇章答二三—二五)

二七、私共は日曜日、どうすべきですか。

私共は日曜日を主の日として守り、若し出来れば、神様の家へ行かねばなりません。

(一〇章答二三—一六)

二八、私共が慾深にならぬようするには、どうすべきですか。

私共は一切のもの、又は最上のものを、欲する代りに、喜んで分け與へ、また求められるより以上のものを、與へる心掛が必要です。

(一〇章答三六—三八)

二九、神様の子供でありながら、悪をした場合には、もう救はれませぬか。

たとへ罪に陥るやうなことがあつても、やつぱり神様の子供です。その御心を痛めた事を悲しみ、恥づるといふのは、神様を愛して居る證據です。しかし何時までも神様を離れ、祈をやめ、引續き悪を行つてゐてはなりません。

(七章答八)

三〇、私共が救はれたる後、もし悪をなして、神様の御心をいためたなら、どうすべきですか。

私共が救はれた後、もし罪に陥つて、神様の御心をいためたなら、正直に其の事を悲しみ、すぐ神様と悪をなした人との救を求め、さらに神様の御助で、もう再び悪をしないと決心せねばなりません。

(七章答一〇)

第七章 聖書

一、聖書とは何ですか。

聖書とは、神様と其の御意につき、私共の知らざる事を多く教へてある書物で、これは世界最上の書物です。

(九章答二、三)

二、聖書はどうして造られましたか。

神様は昔、善い人々を用ひ、私共に知らせやうと望み給へる所を書かせ給ひまし

た。その人々の書いたものが集められ、聖書となりました。

(九章答四、五)

三、聖書が教へてゐる事の、或るものは何ですか。

聖書は神様とその愛及び善、また救主イエス様のこと、それから私共が此の世で送るべき正しき生活、さらに未來の生命に關して教へてゐます。

(未だ聖書の讀まれてゐない地方の實情につき思想せよ。甚だ多くの偶像があり、それを拜むに當つては、殘酷なる行爲が行はれ、惡靈は民衆を悩ましてゐるのである。一方また若し私共がイエスと、其の愛さについて知らなかつた場合には、どんな悲惨な生活を辿るべきかにつき語るがよい。神が此の驚くべき書を與へ給うた事を感謝し、その精神を盛にせねばならぬ。これを讀むことによつて、現在と未來とに處する道を知ることが出来る。)

四、聖書に於ける二つの主要な部分は何々ですか。

聖書の主要なる二つの部分とは、イエス様の來り給へる前の事を記した舊約聖書と、その後の事を書いた新約聖書とです。

舊約の時代には、モーセ、ダビデ、ダニエルの如き人が存在してゐた。舊約聖書には、當時の善人たちが、アダム、エバが罪を犯して以來、約束された救主の來り給ふのを、どんなにか待望んだ事が記されてある。新約聖

書には、その救主イエスが、どんなに美しい地上生活を送り給うたか、(二三の出來事を思起せ)また私共の罪のため死に、今では私共の側近く在して、すべての正しい事に於て、助を與へ給ふ事を記してある。

五、聖書は、多くの書によつて、成立つてゐますか。

聖書は小な六十六卷の書が集りて、一冊となつた大きな書です。

これら六十六卷の書は、住みし時代も、場所も各々別々な、四十人以上の人々によつて書かれた。彼らの中にはダビデやソロモンの如き王あり、羊牧のアモスや、ベテロ、ヨハネの如き漁師もある。またルカの如き醫者も加はつてゐる。その種類も多く、歴史あり傳記あり、詩もあれば書簡もある。その他も加へられてゐる。而も之らは他の書と相關連して、恰も一つの物語となつてゐる。この一事を見ても、神がその筆者達を導き給うたに相違ない。

六、私共は聖書を、どんな方法によつて、神様の御言であると、尊ぶべきですか。

私共は聖書を大切に扱ふこと、また之が讀まれたり、説明されたりする時、注意してきくことにより、更に出來るかぎりよく學び、その教に従ふ事によりて、尊ぶことが出來ます。

聖書は神の書である故、最も丁寧に扱はねばならぬ。落書したり、塵の中に放つて置いたり、手荒く取扱つて

はならぬ。聖書を賞品として貰ふはよいことである。しかし之が少しも自分でその内容を讀まないか、又は讀み
きかされないなら、何の役にも立たぬ。(例)一郵便配達夫が、糸子に手紙を配つていつた。彼女は之をさても喜
び、開かないで臺の上に飾り毎日眺めてゐた。母が来て之を見、いうたのである。「お前は何かいふ愚かてせう。
中をあけて何が書いてあるか、讀んでごらん」と。糸子が開いて見ると、それは叔父からの手紙で、近いうちに
懐中時計を送つてやると書いてあつた。

聖書は私共の案内書である。(海員が使用する海圖につき語れ)それ故、私共はこの中に、救と神及び天國へ往
く道の示してあるを知り、大切にせねばならぬ。

第八章 最後の事件

一、イエス様はもう一度、この地上にお出になりますか。

イエス様はやがて、力と榮とを以て、もう一度この地上にお出になります。

(一二章答二)

二、イエス様の、再びお出になるのは、何時ですか。

イエス様の、もう一度お出になる時を、知つて居る者は誰もありません。

(例)太郎が次郎に「君の父さんは、長いこと留守ですか。何時、お歸りですか」と尋ねた。次郎は「何時か知
らぬよ。しかし父さんは歸ると仰つた。僕は待つてゐる所です」と。

三、イエス様の再びお出になるため、私共はどうして用意せねばなりませんか。

先づ罪から救はれ、毎日に神を喜ばせて居るなら、何時、イエス様がお出になつて
も差支へありません。

(一二章答四)

四、イエス様が來り給ふとき、どんな事が起りますか。

イエス様が來り給ふとき、善人も惡人も、死んだ人は全部よみがへります。

(一二章答五)

五、死んだ人が甦つた後、どんなことが起りますか。

死んだ人が全部よみがへつた後、審かれるため神様の御子の前に伴はれます。そし
て善人と惡人とは別々に分けられてしまひます。

(一二章六—一〇)

六、審かれた後、善人と悪人とは、どこへ行きますか。
審かれた後、善人は天國へ、悪人は地獄に行きます。

この世でも善人と悪人とは、屢々別にせられる。例へば横着な少年や少女は、罰をうけて、他の者が遠足に行くときにも、連れてゆかれぬ事がある。また悪人は刑務所に入れられてゐる。

七、なぜ悪人は地獄へゆかねばなりませんか。

悪人は神様が彼らを愛し、罪から救はんとて、イエス様を與へ給うたのに、救はれようとしなから、地獄に行かねばならぬのです。

(二二章一五——一七)

八、天國はどんな所ですか。

天國は罪も悲しみも死もなく、各種の喜がみつる美しい所です。

(二二章二一——二四)

九、天國には誰が在るか。

天國には神様と、天の使徒、その他、この世で心から神様を愛し、事へた凡ての人があつて、

人があつて、

(二二章二一——二四)

一〇、天國には子供がいますか。

心からイエス様を愛した子供や、一度もイエス様の事を聞いた事がないけれども、善い子になりたいと努めた子供、またごく幼くて何も知らぬうちに死んだ幼児たちが天國にあつて、

この世界には幸福で、よく笑ふ子供があるため、明朗なのである。(子供のゐない世界を考へてみよ) その如く天國に於ても同様である。世界の各地から、ごく幼い時にイエス様の召をうけた者ら(もし出来れば、小隊内の幼児の名をあげよ)は、この世の悲しみの数々を少しも知らないで、天國では此の上もなき喜にあふれる。

一一、天國で一番うれしい事は何かですか。

天國で一番うれしい事は、救主のイエス様をほめ、つかへ、そして御一しよに住むことです。

私共がこの世で一番うれしいのは、自分を最も愛して下さつた人々と一緒に居ることである。天國で私共を愛

して呉れた人々に、今一度あふここの出来るのは喜である。しかし更にうれしいことは、イエスと共に何時までも住み得ることで、もう「さようなら」をいふことはいらぬ。

第九章 救世軍と子供

一、なせ救世軍は集會をするのですか。

救世軍は集會をするのは、私共が救はれ、どんなに神様を愛し、お仕へしたらよいかを教へる爲です。

子供は腹の空いた時、母の所へ往いて食物を貰ふ。もし知識が欲しいなら、學校に往く、なぜなら其處で各種の興味ある事が教へて貰へるから。(敷衍)神は私共の靈魂が、食物や知識では間に合はぬ別の食物が必要なるを示し給ふ。そして救世軍の集會では、その靈魂の食物とも見るべき聖き事や、神に關して教へられる。

二、私共は集會でどうせねばなりませんか。

集會では敬虔で、注意深く、かつ従順であらねばなりません。一緒に歌ひ、また祈る時には、つとめて祈らねばなりません。

(例)幼年義勇團員ジャックは練習のとき、とても活潑であり、ヒラミッドは上手、繩飛もうまく、その他の遊戯も素晴らしい上手で、甚だ活動性に富む少年であつたが、集會に出た時は、隣の子供と話したりせず、祈る時は頭を下げ静かにして居たので、人々は彼の態度と善良な事をほめてゐた。今日では善き救世軍士官の一人となつてゐる。

三、私共は救世軍の指導者や、先生達に對し、どうせねばなりませんか。

私共は救世軍の指導者や、先生達を愛し、その命に従ひ、かつ祈つてあげねばなりません。

(二三章答一一)

私共は祈るとき、常に大將の事を憶え、(大將の事及びその仕事につき報告する)また凡ての士官、殊に己が小隊の士官のため祈らねばならぬ。

四、救世軍で子供を神様に獻げるとき、どんなにしますか。

將來その子供が救はれて軍人となる事を願ふ親は、救世軍で神様に其の子供を獻げるのです。

(獻見式につき語るか、又はイエスの獻見式を受け給へる事を話せ。ルカ二・二二——二八)

五、親に献見式をして貰うた子供は、救はれたのですか。
 親に献見式をして貰うたからとて、救はれたのではありません。救はりたい者は、自分で神様にお願せねばならぬのです。

(例)花子は赤坊のとき、救世軍で献見式をあげた。親は彼女に、祈る仕方を教へ、またイエスと其の愛とにつき語つた。花子はどうかして善い子になりたいと思ひ、或日、幼女義勇團の練習が終つたとき、分隊長にいうた。「父さんご母さんは、私をイエスさまに差上げました。今日は私が自分をイエス様に差上げます」と。そして跪いて祈り、今までの悪つた事を悔改め、救を求めた。この時以來、花子は特別の意味で、神の子供の一人となつた。

六、献見式を、あげて貰はなかつた子供でも、救はれますか。
 献見式をあげた者も、あげなかつた者も、救はれます。イエス様は凡ての者の救主だからです。

(この所で子供らに、善くなる事を教へなかつた親を有つ者、又は救世軍人の子供でない者を勵ますがよい)
 七、献見式をあげたら、誰でも救世軍人になれますか。

救世軍で献見式をあげても、救世軍兵士とはなれませぬ。兵士となるには、自分が

ら進んでなるのです。

(二三章答二)

八、なせ子供は、少年兵にならうとせねば、いけないのですか。
 子供らが少年兵に、ならうとせねばならぬのは、神様に事へ、罪に勝つ生涯より、貴いものはないからです。

(救助船の人々、消防夫、又は醫者など、人命を助けるため奉仕する人々の働と比較せよ)

九、子供はどうすれば、少年兵となれますか。
 子供が少年兵となるには、まづ本當に救はれ、若しその指導者が、よしと認めるなら、少年兵の約束書に名を書くのです。その後、救世軍々旗の下で、少年兵に加へられるのです。

(二三章答六)

一〇、少年兵の約束を言うて下さい。

「私はイエス・キリスト様を、わが救主と知り、わが罪が赦された事を信じます。
 私はイエス様の御助で、その愛せらるる従順な子供となり、また忠實な兵士として、他の人々をイエス様の許に連れ来るため盡します。私は祈をなし、聖書を読み、酒類を飲まぬ事を約束します。」

一、少年兵の務を言うて下さい。
 少年兵は兵士會の開かれる時、これに出席し、野戦や營内集會にも出来るだけ出席し、制服を着るか、又は徽章を着けねばなりません。

少年兵は、どうすれば、善き大人兵士になれるかを學ばねばならぬ。それには男子でも女子でも、實際上の戦に参加する事によつて學び得る。成程、最初のうち其のあるものは、甚だ困難で、また氣が進まぬかも知れぬが、忍耐もつてやつてゐると、大層楽しいものとなる。

二、少年兵は、どんな服装をせねばなりませんか。
 少年兵は質素な服装をなし、寶玉類や其の他の飾物を用ひてはなりません。

（一）の所で注意を要する事は之である。子供らは衣服を買ふとき、選擇の自由がない事である。であるが、少年

兵にその眞意を納得させるため努めよ。即ち出来るかぎり、自分はイエスを愛しない人々とは、全然、別であることを知らせるよう、衣服に於ても表すべき事の必要を知らせよ。一三章答二〇）

一三、少年兵は、家庭に於てどう振舞ふべきですか。
 少年兵は家に於て、両親又は自分の上に居る人々に従ひ、彼らを助け、愛し、また無私であらねばなりません。

一四、少年兵は學校で、どう振舞はねばなりませんか。
 少年兵は學校で、先生が見てゐても、居なくても正しく行はねばなりません。出来る限り勉強し、友達に親切をつくし、勇しく自分がイエス様の側に、属してゐる事を、示さねばなりません。

一五、少年兵は、遊んでゐるとき、どんなに振舞はねばなりませんか。
 少年兵は、然るべき時に心からよく遊び、その遊び友達に對して親切で、氣立よくなし、喧嘩、だますこと、賭事、意地悪又は悪しき行爲をしてはなりません。

一六、少年兵は、世俗めいた楽しみ場所へ、行つてはなりませんか。
少年兵はイエス様が御覧になつて、お嫌ひになる如き、世俗めいた楽しみ場所へ、出入してはなりません。

(例)元子は叔母に伴はれて無言劇を見に行つた。彼女は救世軍の少年兵ではなかつたから、救さいふ事につき餘り深く知らなかつたが、大層、心地の悪いことを感じた。そして自分の心の中で次の如くいうた。「もし此の場へイエス様が來り給うたら、私はどうしようか知ら」。それから後は、絶対に斯る劇を見物には往かなかつた。

一七、どうすれば少年兵は、他の人をイエス様に伴ひ得ますか。

少年兵は他の人を、イエス様に導くため、つとめねばなりません。まづ善き生活をなし、自分になし給へる恵を語り、集會に誘ひ、出来るだけ救世軍の働を、助ける事によつて、つとめねばなりません。

(例)淑子は少年兵であつたが、その家は甚だ貧しかつた。彼女の心から愛してゐる父は酒呑であつた。或晩のこと、「お父さん、今晚、救世軍のお集にいらつしやらない。私が獨唱するのでですから、」と誘うた。父は集會に行き、後の方に坐り、娘の歌をきいてゐた。やがて淑子は父の所へゆき、「お父さん、心を開いてイエス様をお迎へになつては、」とすすめた。父は恵の座にすすみ、その罪を赦された。今では鼓手軍曹をしてゐる。

一八、少年兵が、神様から受ける、十の恵を言うて下さい。

少年兵が、神様から受ける十の恵は、次の通りです。

信仰、愛、謙遜、純潔、親切、眞實、服従、有要、忍耐及び勤勉です。

(この十は、両手の指に數へて、記憶することも出来る)

一九、なぜ救世軍に、軍旗があるのですか。

救世軍に軍旗のあるわけは、世界各地の神様のため戦ふ兵士を、一つにまとめるためです。

(一三章答二二—二四)

(國旗や救世義勇團旗につき語れ)

二〇、軍旗の赤色は、私共に何を思はせますか。

軍旗の赤色は私共のため、流し給へるイエス様の血を思はせます。

イエスは私共の罪が赦されるため、十字架上で死に給へる時、赤き血を流し給うた。それで私共は、軍旗の赤色を見るたびに、この事を想起さればならぬ。

二一、軍旗の中央にある黄色は、私共に何を思はせますか。

軍旗の中央にある黄色は、罪を亡ぼし、正しきを行ふ力を與へる聖靈の火を、思は
せませす。

火は屑を焼きつくし、金を潔め、水を湯にわかし、機械を動かす。(敷衍) (聖靈が火の如き働をなすものたる
を示せ。五章答八)

二二、軍旗の圍にある青色は、何を思はせますか。

軍旗の圍にある青色は、私共に神様の聖きことを思はせませす。

青色は雲なき空の色であり、私共に聖きを思はせる。創立者は私共に神の聖にして、また潔める方なる事、及
び聖靈が私共の心を潔め給ふ事を思はせるため、軍旗に青色を加へたのである。(先週の學課を想起せ)

我は心から赤、青、黄の軍旗に忠實を盡さん。

救世軍問答註解終

Printed in Japan

大正四年十月二十八日 發行
昭和十二年六月十五日 改訂印刷
昭和十二年六月二十日 改訂八版發行

定價五拾錢

不許
複製

編輯者 山室軍平
東京市神田區神保町二丁目十七番地

印刷者 秋本宗市
東京市麹町區内幸町一丁目四番地

印刷所 株式会社ヘラルド社
東京市麹町區内幸町一丁目四番地

發行所

東京市神田區神保町二丁目十七番地
救世軍出版及供給部
(振替東京四四〇〇番)

終

